

『緑のテーブル』 作品分析(1)

高野 牧子

I. 研究目的及び方法

クルト・ヨース (Kurt Jooss 1901-1978) 振付の『緑のテーブル』は反戦をテーマに掲げ、1932年パリの国際振付けコンクールで1位を授賞後、60年近くたった今日でも世界各地で演じ続けられている作品である。また初演後、公演用に若干付け加えがあったものの、その後は改変する事なく、彼自身や娘のA. Markardによって、作品が保存されている。この様に時代を越え、地域を越え、存在し続ける『緑のテーブル』を構造的に説明し、動きを分析し、考察していくことを目的とする。

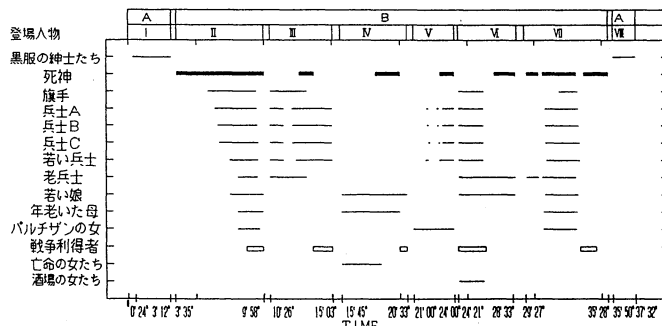
研究方法はVTR作品分析を行う。使用VTRは①スターダンサーズ・バレエ団公演1983. 8. 10土浦を主に用い、②同団、1979. 7. 浅草公会堂、NHK収録、1980. 放映、及び③ジョフリーバレエ団、1982. 12. 13, N. Y. PBS放映を参考フィルムとして用いた。

ヨースは「全ての動きが絶対的にはっきりとした意味をダンサーに対してだけでなく、観客に対しても持つべきである。」¹⁾と述べ、動きに明確な意味性が必要であることを主張している。そこで、ヨース理論の集大成といえるJane Winearls『MODERN DANCE: The Jooss-Leeder Method』、河井富美恵、他共訳、『創作ダンス入門』で述べられている構成や動きの表現性と照らし合わせ、『緑のテーブル』に内包されている意味性をつかみ、この作品の特性を考察していくこととする。

II. 結果及び考察

1. 『緑のテーブル』概要

図1: 『緑のテーブル』上演構成



I: 黒服の紳士たち II: 別れ III: 戦斗 IV: 追われた者たち V: 裏切り VI: 酒場 VII: 最後に残った者たち VIII: 黒服の紳士たち

振付け クルト・ヨース (Kurt Jooss)
 初演 1932年7月3日, パリ, シャンゼリゼ劇場, 国際振付けコンクール, 1位を受賞
 日本初演 1977年9月8日, 東京文化会館, スターダンサーズ・バレエ団
 音楽 フレデリック・コーエン (F. Cohen)
 衣装 ハイン・ヘクロス (H. Heckroth)
 仮面 ハーマン・マーカード (H. Markard)
 照明 ラルフ・ホルム (R. Holmes)

2. 構造分析結果及び考察 (図1)

(1) 時間構成

① 場面展開

全体の上演時間は37'32"であり、8場面から成り、A-B-Aの構成である。各場面とも4'30"前後におさめられ、スピーディに無駄なく、均一である。また各場面毎に完結されつつ、しかも各場面が関連し合い、戦争の様々な悲劇的局面を描き出す場面構成が成されている。

② 登場人物の推移

黒服の紳士たちがI, VIII場面登場し、10人で完結している。死神はII場面から登場し、最初の登場は6'23"と他の登場人物と比較し、最も舞台上にいる時間が長く、深く強く死神の存在を最初にアピールしている。また死神の登場間隔を狭めることでクライマックスへと追い上げ、場面毎には少ない人数で終わらせることで緊張感を高め、死の孤独を象徴している。

(2) 空間構成

① 基本的隊形

「縦列は個人、横列は集団を示し」²⁾、黒服の紳士たちが銃を発砲する時や新兵の入隊では横列し、没個性の集団を表現し、VII場面での犠牲者たちの行進では縦列し、一人一人の命の尊さを訴えかけるなど巧みに使い分けられている。

② フロアパターン (以下FP)

死神は最も「支配的」³⁾であるセンターに多く位置し、直線のFPで、死神の「目的と決断」⁴⁾を観客に訴え、唯一の円のFPはまさに死神の勝利宣言の誇示である。また死神の餌食となった死者と共に上手前へ退場することが多い点と、下手奥から上手前への斜めのラインの強調で、上手前の幕の中が、死の世界であるという印象をもたらす効果をあげる。

3. 運動分析結果及び考察

本研究では構造分析より重要性が明かとなった死神に焦点を絞り、運動分析を行った。死神のソロの動きは1'38"でその構成は、Aフレーズ×2、Bヴァリエーション×1、Aフレーズ×2である。そこでAフレーズを抽出し、動きをヨース・レーダー法における視点から分析し、動きが内包する意味性を考察していく。

(1) リズム (Rhythm Factor)

下半身で規則的に足踏みを続けるところから、均一のリズムが生まれ、一方、拳を振り上げる時後ろにアクセントを持った動きとなり、均一が破れる。従って「目的性」で「緊張の集中」⁵⁾を表現している。

(2) ダイナミクス (Dynamics Factor)

エネルギーは強く、動きの出発点は中心的で、スピードはクイックであり、「緊張の集中」や「自己中心的」⁶⁾な姿、切迫感を表現している。

(3) 方向 (Direction Factor) 図2

図2 第4軸の強調

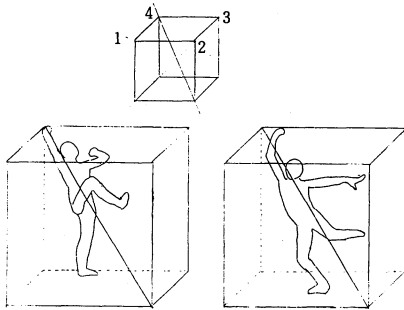
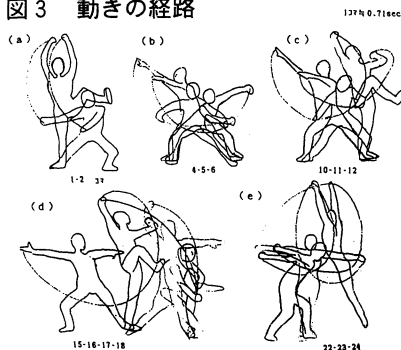


図3 動きの経路



正面と上手前のみで構成され、曖昧な方向を持たない。正面方向でのシンメトリーは威厳を喚起させる方向であり、これと第4軸とする斜めの軸にそったポーズが強調されている。この斜めの軸はFPで明確化された上手前の強調と同調するものであり、FPと動きの方向を貫徹することで空間を巧みに演出し、上手前を死の世界として十分に意識化させていると考えられる。

(4) デザイン (Design Factor) 図3

身体的デザインで特に足はフレックスで、大地を規則的に踏みしめ、「刻々たる死への歩みとしての」⁷⁾時を象徴している。また動きの経路で、特に、腕の動きは束縛された流れを保ちながら、最初に大きく上から右へ弧を描きながら打ち下ろし(a)、次に肩関節を中心に左右に振り運動し、力を蓄える(b)。そして、一気に円の軌跡を描いて拳を振り上げ(c)、腕は保ちながら斜めに下がる。これを再度繰り返した後、ついには拳を振り上げるエネルギーは空中への跳躍を伴い、完全な円を腕で描きながら、腕を水平に伸ばした垂直姿勢で終わる(e)。半円が「強くおこなわれると、尊敬の気持ちをつたえることができ」⁸⁾、また完全な円は「身体的活力にあふれ」「気分を引き立たせる」⁹⁾表現性を持つとされ、死神の持つ威厳とその力のみなぎり、高揚を意図していたと考えることができる。さらに弧の軌跡は、死神が持つといわれている大鎌を打ちふるうようにも見え、動きの意味の二重性をもちつつ死神を明確に象徴しているのである。

Ⅲ. まとめ

VTR作品分析の結果、『緑のテーブル』は、均一で無駄のない時間構成で死神を核として展開し、特にFPと動きの方向を一貫させることで、上手前を死の世界として象徴化するという卓越した空間性があるといえよう。また死神の腕の動きは鎌を、下半身は時を象徴化し、威厳のある死神の姿で緊張感を高め、死を現出した作品である。

引用文献

- 1) Tobi Tobias, Tobi Tobias talking to Kurt Jooss in September 1976, Ballet Review, v10. nol, spring, 1982, p. 21
- 2), 3), 4), 5), 6), 8), 9), Jane Winearls, "MODERN DANCE: Jooss-Leeder Method", 河井富美恵, 他共訳『創作ダンス入門』大修館書店, 1970.
- 7) 若桑みどり『マニエリスム芸術論』岩崎美術選書, 1980, p.105